

# サユリスト「代表」として、スカーパー！出演を体験して

坂和章平

## 一 「まぼたい」が公開

吉永小百合が竹中直人と共演した『まぼろしの邪馬台国』が〇八年一月一日から公開され好評だ。〇五年一月公開の『北の零年』は、還暦を迎えた吉永の第一本目の記念作品。この年は『ALWAYS 三丁目の夕日』ブームが巻き起こり、第二回日本アカデミー賞一二部門を独占したが、吉永小百合が最優秀主演女優賞を受賞したのはお見事。〇七年に山田洋次監督と組んだ「これぞ日本映画の良心」ともいえる『母へえ』は、ベルリン国際映画祭での受賞こそ逃したものの日本中にブームを巻き起こした。それに続く一三本目の主演作が『まぼたい』だ。

## 二 スカーパー！から出演依頼

〇八年一〇月三日、東京出張中の私の携帯に事務所から「テレビ出演の依頼あり。電話せよ」とのメールが入った。早速確認すると、Hプロデューサーからの依頼で、『まぼたい』公開を記念して「スカーパー！祭りTV！吉永小百合祭り」で全三二作を一挙放映するので、「サユリスト」代表としてゲスト出演してほしいとの依頼。「代表」はおこがましいが、中学時代に三本立て五五円で日活映画を毎週のように観ていた私は、当然サユリスト。また吉永作品のほぼ半分を観ている私ならサユリスト代表の資格ありと自

8

ら判断した私は、次に「なぜ私に白羽の矢を？」と尋ねると、ホームページで『母へえ』の評論を読み「この人ならと確信した」とのこと。そんなうれしいことを言ってくれど、話に乗るのは当たり前。東京での一〇月一六日のテレビ収録に向けて、過去の出演作全一一三本（ナレーション出演の二本を除く）をリストアップし、トークのネタとなる脚本をビデオで再確認。同席するゲストは、何と純愛コンビの浜田光夫氏だ。四五分間のトーク番組の出来は視聴者の判断に委ね、ここではサユリスト代表としての研究成果を発表したい。

## 三 サユリストとは？

サユリストとは、吉永小百合の熱狂的ファン（信奉者）を総称する造語。この手の呼び方はコマキスト（栗原小巻）、アマラー（安室奈美恵）など時代の変遷の中でたくさんあるが、六〇年代から今日まで五〇年近く定着しているのはサユリストだけだ。私の独断と偏見によるサユリストの特徴は次の三つ。第一は、四五年三月一三日生まれの吉永は団塊世代の一、二歳お姉さんとして団塊世代の圧倒的支持を得たこと。良くも悪くも六〇年代以降の日本を牽引してきたのは、圧倒的な数を誇る団塊世代。だからその多くをサユリストとした吉永が強いのは当然だ。第二は、サユリ

ストには入会審査も入会手続もない。つまり自称だけでもOKだし、サユリストは浮気も公認？早稲田大学で共に学んだ熱烈なサユリストであるタモリ氏は、作家野坂昭如氏について「あの人は一時山口百恵に走ったが、俺はさゆり様一筋」と言ったが、これは少し偏狭。つまり、サユリストは兼コマキストも兼アマラーもOKなのだ。だって、いくら浮気してもサユリストの根幹は微動だにしないから。第三は、吉永と同様サユリストはしぶといこと。少女から女への変身、そして清純派女優から大人の女優への脱皮は難しいが、吉永は見事にそれをクリアし五〇年近く第一線の女優業を続けている。それに伴って、サユリストもしぶとい一大勢力として続いているわけだ。

## 四 全一一三本の作品にみる吉永小百合像は？

五七年にラジオドラマ『赤胴鈴之助』でデビューした吉永は、五九年には一四歳で『朝を呼ぶ口笛』で映画デビューした。全一一三作を、六九年までと七〇年以降に分けると次のとおりだ。

図1 1959～69年（14～24歳）10年間の全78作の分布（坂和調査による）

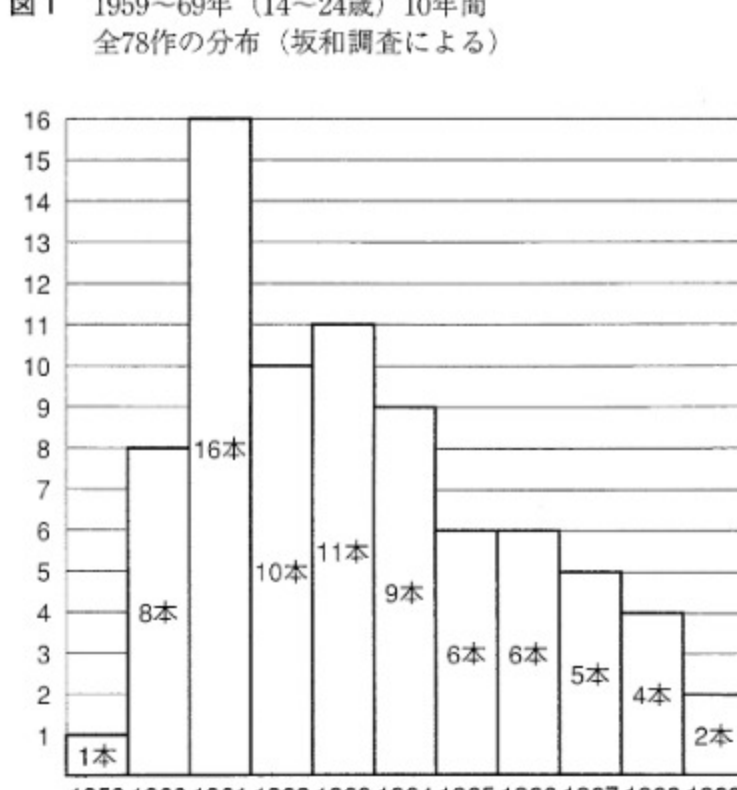


図1を見てわかるとおり、五九年（一四歳）から六九年（二四歳）までの出演作は七八本。ピークの六一年（一六歳）には何と一六本も出演！これはテレビ普及前の、映画が娯楽の王様だった時代ならではの現象だ。ちなみに、純愛コン

9

図2 1970～2008年（25～63歳）38年間の全35作の分布（坂和調査による）

①原則は1年に1本	
②3本	1970年
③2本	1979年 84年 88年 92年
④0本	1981年 89年 90年 91年 95年 97年 99年 02年 05年 06年

ビは四三作あるが、それは六〇年～六六年に集中。六六年に起きた浜田の右目のケガがなければ、一〇〇本を超えたのでは？少女時代の吉永の魅力は清純、純情可憐、初々しさ等で一致するはずだが、難しいのは大人の女への脱皮。図2のとおり、七〇年以降はほぼ一年一本ペースにダウン。これは日本映画全体が衰退期に入ったこと以上に、吉

10

への出演が続く、『まぼたい』に至るわけだ。

## 五 「キューポラのある街」の衝撃度は？

吉永が鮮烈な印象を日本国民に与えブルーリボン賞主演女優賞に輝いたのが、浦山桐郎の監督デビュー作である六二年の『キューポラのある街』。舞台はキューポラ（鋳物工場の煙突）を持った町工場が多い埼玉県川口市。吉永演ずる中学三年生ジュンの父親は、会社をクビにされても労働組合に頼るのはイヤという職人気質の男だから、家計は火の車。これでは高校進学も危ういが、何ゴトにも元気がついて前向きに生きるジュンの選択は？当時「地上の楽園」と言われた北朝鮮への帰国礼讃や、働きながら学ぶことができる定時制高校への過大な評価、さらに労働組合の位置づけや「アカ」という言葉の使い方など、なぜか『蟹工船』ブームとなっている今日と対比すべき論点も多いが、それはあくまで傍論。この映画の本筋は、あくまであの時代ならではのジュンの前向きな生きざまだ。そしてジュンの役柄と完全に一体化した一七歳の吉永の輝く顔は一度観れば忘れられない。これぞ、敗戦と朝鮮特需の終了後、高度経済成長時代に突入していく日本を担う若者の理想像だとすべの日本人が納得したはずだ。ちなみに、二匹目のドジョウを狙って『未成年 続・キューポラのある街』

## 六 「愛と死をみつめて」の社会現象をどう考える？

「マコ甘えてばかりでごめんね、ミコはとって幸せなの」。青山和子が歌いレコード大賞を受賞したこんな名曲をあなただは知ってる？時は一九六四年。東京オリンピック開催の年だ。アメリカ発の世界的規模の金融危機が広がる〇八年一月の今からみれば、五輪景気にわき七〇年の大阪万博で頂点に達した当時の高度経済成長時代はうらやましい限り。そんな中、高野誠と小島道子のラブストーリーとその悲しい結末は日本人の涙を誘う社会現象に。それは、韓流ドラマ『冬ソナ』やセカチューこと『世界の中心で、愛をさけぶ』（〇四年）の比ではなかったはずだ。一番綺麗な時期である一九歳の吉永が、顔の左半分をカテーテルで挑んだ静かな熱演は特筆モノ。東京と大阪の遠距離恋愛は、携帯メールではなく手紙が頼り。そのため心に残るエピソードや名言がいっぱいだ。例えば、①健康な日を三日下さい。そうすれば一日目は故郷へ。二日目はあなたのところへ。そして三日目は？②「ウソの嫌いなマコに教え

## 七 「さゆり伝説」とは？吉永の魅力とは？

超多忙なスター生活と大学生活を両立させ、しかも早稲田大学を二番で卒業したという吉永は水泳も乗馬も得意。そんな頑張り屋で完璧型の吉永には「さゆり伝説」が多い。①浜田と初共演した『ガラスの中の少女』（六〇年）では、身を切るような冷たい湖の中に再三のテストで浮かび続け、本番OK後そのまま失神した、②「泥だらけの純情」（六三年）では、雪の中でじゃれあうシーンを長時間スカート姿で演じ続けた結果足の感覚を失い、撮影後スノーモービルで運ばれた、等々だ。

## 八 反戦平和への想いが作品に

吉永の女優以外の活動が、『夢千代日記』（八五年）で原爆症に苦しむ女性の役を演じた後の八六年から始まった朗読会。長崎・広島から始まった反戦反核の想いと平和への祈りを込めた朗読会は今や全国に広がり、二〇年以上続くライフワークとなっている。そんな吉永の想いがあればこそ、『戦争と人間』の五代順子役や『母へえ』の野上佳代役がいかにピタリ。吉永のそんな心情が、山本薩夫監督や山田洋次監督の想いと合致した時に名作が生まれることを実感！

## 九 おわりに

今回書いたのは、スカーパー！出演を契機として必死に勉強した成果のホンの一部だけ。そのすべてをまとめれば大論文が完成するはずだが、それは後日の課題に。私は〇九年一月二六日に還暦を迎えるが、そんな時期に少しでも女優吉永小百合論を書けたことを、スカーパー！と新日本法規に感謝したい。

## （弁護士）

顔相学的にも卵型のスッキリした頬や眉、目、唇の形等て根拠づけられるらしい。しかし、多くの男性が感じる吉永の魅力はその聖母性。戦後、天皇家は「神聖にして侵すべからず」の存在から、国民の象徴、愛される天皇家に化身したが、吉永はこの両者を併せ持った聖母サマというのが私の持論。さて、あなたの見解は？

12